

ふな はし みや うら
船 橋 宮 裏 遺 跡

調査の経過

船橋宮裏遺跡は稲沢市船橋町花の木・宮裏・市場にかけてひろがる遺跡であり、現状は標高3mの水田及び畑地である。遺跡の東側は「重本横地遺跡」が所在する微高地に連続している。また南には三宅川をはさんで「矢合城跡」が所在する。船橋宮裏遺跡は古代から中世の遺物散布地として稲沢市遺跡番号4-54として登録されているが、しかし本格的な調査は今回がはじめてである。調査は1991年11月～1992年1月にかけて県道稲沢祖父江線建設予定地内において実施した。調査面積は1600㎡であるが、工程の都合上A・Bの調査区を設定し発掘調査を実施した。

調査の概要

遺跡の基本層序は、大きく3層からなる。第Ⅰ層は耕作土。第Ⅱ層は褐色シルトで、遺物を包含する。第Ⅲ層は黄褐色砂質シルトである。しかし、水田耕作地では第Ⅱ層の褐色シルトが削平されている。調査で確認された遺構・遺物は、そのほとんどが14世紀後半から15世紀前半のものであった。以下、今回の調査の中心となったA区の概要を述べる。

A区は、調査区全域にわたって土壌群が点在しており、その分布は数基単位で一つのまとまりが存在する。調査区東半の土壌群は主軸を南北方向に置き、東西2群のまとまりをもつ。調査区西半の土壌群は東西に主軸を置いたもので、やはり2群のまとまりが存在する。これらの土壌はそのほとんどが隅丸長方形であるが、円形プランをもつものも数基確認され注目される。いずれの土壌も出土遺物をほとんど確認できなかったが、ただ1基のみ頸部を欠損した古瀬戸の壺を伴出している。この壺はほぼ直立状態で検出され、副葬品の可能性が高い。土壌の埋土は、層位堆積をもたず、若干の土質の差異は認められるもののいずれも斑土が充填されていた。これは、人為的埋め戻し作業を想定させるものである。

土壌以外の遺構として溝数条、井戸2基、大型土壌1基、火葬施設5基等を検出した。溝のうち調査区中央付近の1条は、コの字状に屈曲して掘削されており、特定の原則に基づいて土壌群を区画したものと考えられる。調査区南東の大型土壌は、他の土壌に比べ楕円形でしかも長大で、長軸8.56m、短軸3.20m、深さ1.12mを測り層位堆積を有する。火葬施設は、長軸90cm、短軸60cm、深さ20cm程度の小型のもので、骨片、炭化物、焼土で埋まっていた。この性格等については今後の課題である。以上の諸点から、この地は、14世紀後半から15世紀前半にかけて、近接する集落の墓域として存在したと考えられる。

(小塚俊夫)



91 A 区全景